

中国60年代と世界

第2期第15号(通巻第21号) 2019.6.27

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1) / 6月例会予稿 労働と教育とを結びつけた下放 思想史研究の立場と方法…前田年昭(3) / 交流と相互批判 〈二〉の哲学で世界を見る(2) 往復書簡:毛沢東の哲学と60年代世界…松本潤一郎・前田年昭(5) / 王兵映画劄記(その2)『無言歌』…土屋昌明(9) / 蔵出し批評 続・むほんの権原はどこにあるのか(連載:滴水洞 010) …前田年昭(12)

例会報告(4月25日)

天安門事件前後の目撃

4月例会は、1989年6月前後に北京外国語学院に語学留学していた小川強氏が、当時みずから目撃した様子を報告した。小川氏にとって、この経験は非常に大きなものだったが、今回の報告が30年間で初めてのことだという。彼は中国の大学生と親しくつきあってきたため、事件当日にも天安門広場に足を運んでいた。以下のような話が紹介された。

胡耀邦の死去あたりから、学生の間ではいろいろな問題がとりあげられるようになった。とくに教育関係者の給料が安すぎるという点を取り沙汰されていた。また、インフレがひどいことがとりあげられていた。例えば、外国人が使用義務とされていた兌換券をブラックマーケットで人民元に換金すると、2倍近くになった。

4月15日に学生デモが行われた際、人数を少しでも多くしたいので、外国人留学生もデモに参加してくれと学生側から頼まれ、清華大学から北京大学・人民大学・外国語学院などを經由して、民族学院までのデモに参加した。シュプレヒコールは「打倒官倒」(官僚腐敗打倒)が主で、その間にインターナショナルを歌うというもので、政治的なものはなかった。その後、新華門前の座り込みにも参加した。そこでは「李鵬出てこい」などのシュプレヒコールがあり、大衆がもみくちゃとなった。突入しようとするのを公安が防いでいたが、けが人が出るほどでなかったように思う。

『人民日報』の社説で「動乱」と書かれると、学生たちは憤慨し、「李鵬おりろ」などと叫ばれた。『人民日報』での「動乱」という表現の危険性を学生たちは認識していなかった。5月13日にハンガーストライキが始まると、北京大学の留学生などは立ち入れなくなったが、北京外国語学院の留学生は少なかったため、自分はハンストをやっている現場にも入れた。民主の女神が建つころは、かなり運動の停滞ムードが濃くなっていた。自分はその

設置の様子を見に行った。広場にある学生のテントも、地方の大学のものが目立つようになった。このころの逸話だが、日中の女子バレーボールの試合があり、日本の応援団が「にっぽん、チャチャチャ」と声援を上げると、中国の観客が「リーボン、シアタイ」(李鵬おりろ)とやっていた。

6月3日当日は、夜9時に北京外国語学院の日本語系の学生たちといっしょに天安門前に行くと、12時くらいに装甲車が入ってきた。着ていた綿入れコートに火をつけて装甲車に飛び乗り、蓋をあけて中に火のついたコートを押しこむ者がいた。自分が見たのは欧米人だった。それを中国人学生が何てことするんだと止めていた。その後、特に何も起らなかったが、学生リーダーたちが学生たちに英雄記念碑の下に集まるように言って、テントの中の学生たちは英雄記念碑の下に集まった。広場の電灯が消されたので、学生たちは綿入れに火をつけて、照明の代わりと暖を取った。広場のテントの中に寝ていた学生を戦車がひき殺したという人がいるが、それはないと思う。みんな声をかけて、記念碑の下に集まっていたから。この段階になると、市民がたくさん見物のようなかたちで記念碑の周囲に集まってきた。そして人民大会堂の方から(広場の西から)軍隊が近づいてきて英雄記念碑を包囲した。彼らは無言で、それに対して北京市民が彼らを罵倒した。学生たちは英雄記念碑から降りて、軍隊が代わりに記念碑を占拠した。その時、軍が発砲するのを一度だけ見たが、それはスピーカーを破壊するためだった。それ以外、軍が学生に発砲する状況はまったく見なかった。学生の移動先を前門の方に確保してあった。そこまでは学生は隊列を組んでいたが、その後は三々五々となった。空は明るくなっており、長安街の方に行けるとい話だったので、人民大会堂の裏を通過して長安街の方に向かった。その段階では、大八車で血だら

けの人を送っている様子や、天安門から少し西の長安街にいる戦車に対して、一本入った路地から市民が火炎瓶を投げている様子を見た。その時、戦車が砲塔をこちらに向けたので恐ろしかった。よく写真で見ると、長安街で戦車に自転車ごとひき殺された学生たちの様子も見た。周囲の学生たちは、この様子を世界に報道してくれと、その場に居合わせた記者たちに叫んでいた。その後、民族飯店で休憩したが、そのあたりには銃弾の跡がたくさん残っていた。すると、西の方からたくさんの戦車が天安門に集結するよう進んできた。戦車はあんなに速く走ると、市民が公安の車をひっくりかえした。

自分と同室の友人は、この期間にウルムチに行っていたが、話ではウルムチではテレビなどで一切報道されず、何もわからなかったという。戦車に一人で立ちまわった人物のことは、日本に帰国してから初めて知った。市民に吊されて焼き殺された兵士のことも、現地では見聞しなかった。北京外国語大学では死者は一人も出なかったらしい。

以上が報告の概要。フロアからいろいろな補足説明があり、興味深い報告と質疑となった。(編集部 T)

付録：天安門当日の目撃談に対する感想

以下に、廖亦武『銃弾とアヘン』所載の劉儀の目撃談に対する小川氏の感想を整理しておく。ゴシック体は廖亦武『銃弾とアヘン』からの引用、明朝体は感想である。

①その後、文化宮のあたり[天安門の東脇]で、装甲車1台に初めて火がつけられた。中に乗っていたのはある師長さんだった。

——夜12時過ぎに広場に侵入してきた装甲車を民衆が阻止した。装甲車の入り口の蓋を開け、乗っていた兵士に殴りかかって引っ張り出し、自分のコート(大衣)に火をつけて装甲車の中に入れて燃やしていた。驚いたのは、首謀者は明らかに欧米人の留学生か旅行者で、広場の学生がその行為を必死に止めていたことだ。

②夜明け前、迷彩服を着た軍隊が出動し、広場に進入して来た。おれはこの軍勢を一目見るなり、防ぎ留めようがないと悟りすぐに糾察隊と高自聯の会議記録を含む名簿リスト類全てにガソリンをかけて燃やした。これがおそらくあの夜、天安門の最初の火だろう。

——人民大会堂側から来た兵士を指すのだろうか？ この兵士たちは民衆から至近距離で「もうお前たちは人民の軍隊ではない」とか「撃てるもんなら撃てみる」な

どの悪態をつかれても一切反応せず、英雄記念碑前に集合していった。一方、歴史博物館前にいた軍隊はまったく動かなかった。解放軍が虐殺をしながら広場に向かっていくという血だらけの伝令は何人か見たが、広場内で撃たれ倒れた人は、自分は一人も目撃していない。また広場の電気が消されたあとは、英雄記念碑の前で持ち寄った衣類などを燃やし明かりと暖をとっていたが、この着火が上記のリストを燃やす行為だったのだろうか？

③その後、拡声器が打ち壊されて音が聞こえなくなった。誰かがその巻き添えを食った。撃たれて記念碑の下に倒れたんだ。ものすごい量の流血だった！

——人民大会堂側から来た軍隊が勢ぞろいして、隊長合図の下、英雄記念碑の拡声器やテントなどを一斉に撤去し始めた。この時はじめて持っていた銃で拡声器を破壊しているのを目撃したが、巻き添えになった人がいるとは考えられない。なぜなら劉曉波らの交渉で、学生たちの英雄記念碑からの撤収が終わったあとに隊長の合図があったからである。また、撤去作業をしている兵士に向かって泣きながら抗議している学生や「法西斯(ファシスト)！」「法西斯！」と罵っている民衆(老人)を多々目撃した。

④黒い山のような軍隊の塊がテントを粉砕し始め、まるで戦争捕虜を駆り立てるようにおれたちを一カ所に囲い込んだ。記念碑の周囲は一面、めちゃくちゃとなり、糾察隊の仲間たちは最後に、二列に並んだ銃口を前にして、涙しながらそこを離れた。

——天安門広場側から侵入してきた兵士を指しているのだろうか？ 既に学生達は英雄記念碑の周りに集結していたので、囲い込まれるような状況ではなかった。自分を含め学生は隊列を組んで広場を去ったが、地元民衆は天安門側から来た兵士に向かい投石をしたり「法西斯！」「法西斯！」の大合唱で挑発していた。この時も歴史博物館前にいた軍隊は一切動かなかった。

⑤おれが人民大会堂の東門まで来た時、学生数人が突然、脇から狂ったように飛び出して来た。追いかける兵士が「止まれ！ 逃げるな！」と叫ぶ声がまだ消えぬ間に、ピュンとクリップの弾丸が地面をさっと横切り、おれも驚いて思い切り高く飛び上がった！

——これはほぼ同じ光景を目撃した。そばに長安街の脇道から戦車に向かって火炎瓶のようなものを投げる者がいて、戦車が銃口をこちらに向けた時は必死になって隠れた。また大八車に乗せられ運ばれていく瀕死または既に死亡している学生または民衆を多く目撃した。

2019/03/22記

6月例会（2019年6月27日）報告予稿

労働と教育とを結びつけた下放 思想史研究の立場と方法

前田年昭

土屋昌明さんの研究ノート「紅衛兵の立場と罪責の問題 前田氏の主張を承けて」を隔靴搔痒の思いで読み進めていたときに思い浮かべたのは「同床異夢」という言葉だった。同床異夢——山田忠雄『新明解国語辞典』は語義を次のように示す。——同居していながら考えている事はそれぞれ別であり、融和しないこと。〔広義では、共同で事に当たりながら究極の考えや目的が異なる意にも用いられる〕

土屋さんは次のように書いている。

出身血統主義に反対するのが文革だとすると、文革の歴史的な側面でいくつかわかりにくいことが生じる。出身血統主義に反対する紅衛兵が登場するのは、おおそ 1966 年 10 月くらいであるから、1966 年 5 月のいわゆる 5.16 通知（「定説」の文革発動）のころは文革ではないことになり、また、文革小組がおこなった 1968 年から 69 年にかけての、紅衛兵のいわゆる下放の本格的展開も文革とは言えなくなり、1969 年に林彪が後継者に指名されたこと、林彪のクーデター未遂、四人組の台頭などは文革とは関係ないことになる。（本誌 13 号 pp.9-14）

何という観念的形而上学！ 内在的理解を欠いたところで、生きた歴史を後知恵で裁断する。これでは、たとえば攘夷と開国、尊皇と佐幕が転変する明治維新史の理解などほど遠いだろう。20 世紀末、構造主義の影響を受けた言語論的転回という名の清算主義は、歴史学の分野でも「流行」し、戦後史学の総括を通り越して、実証まで洗い流してしまった。その典型が物語論である。真実は知りようがなく、歴史は語り手によって異なるというのである。はたして、この考えは正しいのかどうか。

提になる

思想史を研究する際には、人びとの観念や実践を捉える方法論的な省察が求められる。そこでは抽象度の高い語を用いることは避けられず、教育とは何か、労働とは何か、定義することなく、論じることができない。その観念や実践がどのようにして受けとめられ、流布され、人びとのものになっていったのか、しっかり事実を把握する必要がある。

事例を挙げよう。現在の中国の教育はどうなっているのだろうか。

梁鴻『中国はここにある』*¹ は、作者が帰った自分の故郷の農村の現状を描いた作品である。2010 年人民文学賞を受賞し、内外で大きな話題を呼んだ。梁庄は河南省のある村だが、現実の地名ではない。

村に残っているのは老人と子供ばかり。かつては村を挙げて教育に力を注いでいた気風は一変してしまい、子供たちには無気力と無節制が蔓延し、学校はなくなってしまった（第三章 子供を救え）。

他方、中国での教育熱はすごいというレポートもある。「天空の教室」（テレビ大阪、2009.12.31）は、貧困脱出のためにその唯一の手段としての教育に賭ける親たちの熱を伝え、「中国の小学校で今何が？」（NHKBS、2018.12.29）は、応試（詰込み）教育見直しの動きとして、文礼国際学院の「四書五経」古典至上主義や少林鵝坡武術学校、証大小学校の「新教育」を伝えた〔ともに YouTube で視聴可能〕。

中国の教育はいま、実際にどうなっているのだろうか。あれもこれもありという折衷論でなく、統一したものの別表現としての説明が求められる。

公教育とは何か。歴史的に近代の問題として捉えねばならない

下放の考察には、教育、労働をどう捉えるかが前

機械の時代は、それまでの人間の生産行為と人生

との重なりを決定的に変えた。それまでは働くことへの手ほどきが人生への入門だったが、人びとは生活の場である家庭から、生産行為の場である工場へ通うようになった。初期資本主義における大量の児童労働は、それまでの習慣の継続にすぎない。しかし結果、子供たちは学びから遠ざけられ、貧困化の渦に投げ込まれてしまう。工場労働には人生への学びはない。ここから公教育が求められてくる。人生への学びとともに、より高度の労働のリズムの求めに応じる知識と訓練を果たす場として、である。学校は、社会の必要を実現するための、組織された専門家の組織である。素人の専門家に対する、劣等生の優等生に対する、依存が一段と進んでゆく。

世界の富を作り出すのはただ労働のみだから、労働者は労働を通して自然と社会を知り、自己を形成しうる。資本家は消費するだけで、実は労働者に依存するのみである。労働者が自由と自立を獲得していくのと対照的に、資本家は自らの意識においては自立していると思っけていても客観的には自立を喪失していく。労働者は自らの意識においては、飢えと失業への恐怖から資本家に依存させられていると思ってしまうが、真理においては自立的である。その分岐点はどこにあるのか。それは、労働を通じた外との関係が持てるかどうかである。

これまでの人類の歴史をふりかえると、労働を社会発展の土台として位置づけた思想はマルクス以前には存在しなかった。プロレタリアートが生まれていなかったからである。「多くの人たちが、労働をあやまって神が人類に与えた懲罰だとみなしているのに、共産党員だけが、労働を正しく人類自身の権利だとみなしている」*2

ところが、ロシア革命、中国革命の社会主義は、精神労働と肉体労働の差異、専門家と素人の差異をなくそうと闘ったが、包囲する資本主義を過大に恐れ、労働を思想改造のための強制と懲罰として与える過ちをおかしてしまった。かくして労働者の国づくりは初戦は敗北、崩壊し、資本主義が復活した。

下放と識字運動との統一した把握を

半世紀前、日本の資本と権力は、夜間中学を廃止

しようとした。単独決起して闘いを始めた高野雅夫さんは、永山則夫の「私設」夜間中学一生闘学舎チャリッポの闘いを経て、仲間と共に最近、『生きる闘う学ぶ 関西夜間中学運動 50 年』（解放出版社、2019 年）を出した。なぜか。教育機会均等法によって、夜間中学設立が認められ、むしろ義務づけられ、これを「勝利」と捉えるのではなく、「危機」と捉えたからである。この半世紀、資本と権力は、部落解放運動に対して同和対策事業特別措置法(同対法)が、障害者解放運動に対して障害者自立支援法が、失業野宿者に対してホームレス自立支援法が……と、次々と懐柔、包摂を進めてきた。経済主義に陥っている運動と闘いの側は、(一部を除いて)これを「成果」と捉えてしまった。利権主義に溺れる傾向まで現れ、運動は四分五裂、衰退した。

夜間中学廃止反対運動の仲間は今、水平社宣言(1922)の原点に立つことを呼びかけている。

過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等の爲めの運動が、何等の有難い効果を齎らさなかった事實は、夫等のすべてが吾々によって、又他の人々によって毎に人間を冒瀆されてゐた罰であったのだ。そしてこれ等の人間を勤るかの如き運動は、かえって多くの兄弟を墮落させた事を想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である。〔水平社宣言〕

中国人民解放軍は、かつて識字の軍隊でもあった。うち続く戦乱で彷徨するストリートチルドレンは、解放軍から生きるための文字と言葉を学んだ*3。その解放軍は、毛沢東の死と中国の変質を経た今、人民に銃を向けて恥じない獣に墮した。

しかし中国革命の原点は識字運動だった。革命前、人びとはイギリスや日本、フランス、ドイツなどの植民地支配下、人間としての尊厳を奪われ、言葉を奪われていた。噴きだす呐喊には呻吟する沈黙が張りついていた。抵抗は文体革命として始まり、五四白話文運動で句読点(標点符号)を発明し、分かりやすい文体を広めた。わざと難しい言い回しをする知識人を鼻つまみにし、阿Qたち(流動的下層貧民)

は、生きるための武器になる文字と言葉を取り戻していった。識字は、無文字者への啓蒙と「知識人の下放」との双方向だったのである。

プロレタリア文化大革命と下放は、中国革命の体験だった。専門家、優等生に抑えつけられ続けてきた素人、劣等生が、文字と言葉を取り戻し、反撃した。闘い取った壁新聞の権利を駆使し、もの言わぬ民がメディアとなって、街を支配した。保皇派紅衛兵の乱暴狼藉のあと、造反派紅衛兵ははじめおずおずと、やがて怒濤のごとく、出身階級決定論に反対して闘った。中高生が、そして臨時工が、立ち上がった。しかし、逆流のなかで、コミュニオン（人民公社）の夢は潰えた。

冒頭に引いた土屋さんの文章は、上からの為政者の視点であっても、下々の庶民の視点ではない。下放を研究するというなら、自らが下放すべきではないか。仮にできないとしても、目を世界に向け、思いは下層人民に向けようと努力し、できないなり恥じらいと節度を持って、生き、学ぶべきではないか。下放とは、文字を奪われた人びとが文字と言葉

を取り戻す一方で、文字を「持つ」人びとの「翻身」とも一体の社会運動である。

明確な立場と方法、歴史に対する内在的理解を欠いた研究は学問の名に値しない。私は問いたい。何のために下放を研究するのか、と。

注

- * 1 鈴木将久ほか訳、みすず書房、2019（『梁庄』『人民文学』2010年第9期に発表、『中国在梁庄』江蘇人民出版社/中信出版社、2010）
- * 2 愛新覚羅溥儀『わが半生』小野忍ほか訳、大安、1965、引用は下巻p.215
- * 3 袁静『ちびくろの出生』新日本出版社、1966（原名「小黒馬的故事」）

【当日配布資料】

- 拙稿「生涯を貫く下放のはじまり」〔『上野英信展図録』福岡市文学館、2017年、pp.16-19〕
 同「人が変わる可能性を信じつづけた英信の原点＝中国革命」〔同、pp.20-21〕
 同「大衆の武器「絵ばなし」で描く“弱者”の強さ」〔同、pp.22-23〕

（まえだ・としあき、本誌編集、組版校正者）

交流と相互批判

〈二〉の哲学で世界を見る(2) 往復書簡：毛沢東の哲学と60年代世界 松本潤一郎・前田年昭

〔第2期第4号からのつづき〕

松本潤一郎さま

☒多様性の称揚は、〈一〉による支配の荷担勢力になりうるのではないか

4月7日付 前田年昭

多様性や差異を称揚する〈一〉派が通史記述を妨げていることは、ご指摘のとおりです。松本さんは新著『ドゥルーズとマルクス』（みすず書房刊）で、「〈多〉の〈一〉への反転から脱け出すには、「敵対関係」という〈二〉を導入して〈一〉を割ることが必要」と書かれ、「反動に対して造反するかぎりてつねに有理である」とのパディオの『矛盾の理論』（一九七五年）を引用されています。毛沢東の中国は60年代、ベトナム人民の抗米戦争という実際の闘

いの事実のなかで、「米ソの冷戦と対立という外皮」を裏返して“米ソの世界共同支配”を〈見える〉ようにし、米ソのどちらにつくか、ではなく、造反派としての決起を呼びかけました。日本の新旧左翼は当時、ベトナム戦争を米ソの代理戦争としか捉えませんでした。これは歴史を創造する造反の立場に立ち得なかった結果です。

この点で考えておきたいのは、「多」は「一」の批判たりうるのか、ということです。日本には「一即多」「多即一」のファンが少なくありませんが、60年代中国における「一分為二」派による「合二而一」派に対する闘争のなかで、「合二而一」派は、「一を分けて二となす」は分析、「二つが一つになる」は総合、で両方必要だ、とか、「対立面の不可分のむすびつき」を探し求めることが大切、とか、強調

しました。ドルーズの〈多〉はこれと同じではないでしょうか。いやそもそも、〈多〉は〈一〉の対決軸になりうるのか、否、むしろ〈多〉は〈一〉による支配の荷担勢力（自覚的無自覚的を問わず）ではないでしょうか？ 唯物論と弁証法は、観念論や形而上学に“包摂”されることで生きながらえるのではなく、観念論や形而上学に造反し続ける運動のなかでしか鍛えられないと私は考えています。

前田年昭さま

☒冷戦後の今こそ〈二〉の思考の本領は発揮されうる

4月14日付 松本潤一郎

前田さんのご指摘通り、〈多〉と〈一〉は共犯関係にあると、私も思います。米ソ対立の代理としてベトナム戦争を捉える立場は、〈多—一〉の枠組の外から出ず、むしろそれを補強することです。〈二〉という、米ソといった大きな対立を思い浮かべがちですが、実際には自己解体と変革が〈二〉の要です。自分を二つに分けること、つまり自分を変えるということであって、他者との敵対関係ではありません。もちろん自己変革を妨げる動きとは敵対せざるをえませんが、それは二次的な事態であり、一次的には、〈二〉は自己との関係です。

おっしゃる通り、冷戦は東西対立を装った、米ソによる世界の共同支配でした。西側諸国における〈多〉の立場は、つまるところ市場の擁護に帰着します。冷戦期には可視化しませんでした、〈西〉が全世界を覆ったかに見える現在、そのことは明らかです。

冷戦期、西側諸国の左翼（特に社会民主主義派）の眼には、市場は自由の理念を支える希望であると映っていたでしょう。フランスの〈六八年五月〉以後に注視された西側諸国のマイノリティ運動も、今日ではその多くが各地で社会の中に包摂され、承認されつつあります。それは多くの場合、マイノリティを商品として承認することであり、マイノリティの労働力を商品化して、労働市場へ包摂することを意味します。人権を白眉とする諸々の権利は、私的所有に基礎づけられた個人主義的主体へと、マイノリティをつくりなおします。そしてかつての東側諸

国を含めた世界中に、自由＝市場は侵出していきました。

文革に触発された第〈三〉世界の思想は、冷戦崩壊とともに消えたのでしょうか。私はそうは思いません。冷戦期、米ソ対立の外へ出る想像力を指したこの思想は、対立という見せかけが消えた今、〈一つ〉の世界の中からこの世界を二分する運動としての本性を可視化させました。その意味で、むしろ今こそ、〈第三世界〉の思想は重要だと思えます。

松本潤一郎さま

☒〈二〉の思考を、現下の情勢、日本の現実のどこに発見していくか

4月22日付 前田年昭

60年代、中国によるソ連批判のひとつは、ソ連が帝国主義と植民地主義の共犯者になっているという指摘でした。ソ連は当時、アメリカとの「平和共存」を掲げ、民族解放運動は経済任務が中心的任務という「新しい段階」になっていると主張しました。これは民族解放運動を抑えつけるものだと中国は批判しました。ソ連は新植民地主義の弁護人ではないかというわけです。アメリカのベトナム侵略に対する反帝国主義戦争の国際的な昂揚のなかで、この批判は〈一を分けて二となす〉批判の力を持ちました。物質の力に転化し、世界の社会主義運動と民族解放運動は二分されていきました。対立物の相互浸透で、中国自身にも二分は及び、内部における社会排外主義、修正主義との闘いという、自分自身の翻身へ、文化大革命へとつながっていきます。

このように〈一を分けて二となす〉は、古い質の「対立」に介入し、新しい質を打ち立てていく、同時にそのなかで自分自身をも翻身していく闘いです。問題は、そのときまだ弱々しく小さなものであっても、新しい質をもった運動をいかに見いだしていくか、です。

毛沢東は中国革命の初期、「資本家対労働者」という図式にとらわれず、暴動的な農民運動のなかに新しい力を見いだしました（「湖南省農民運動の視察報告」「中国社会各階級の分析」）。

現下の日本ではどうでしょうか。「ひとにぎりの資本家と圧倒的多数の労働者」という図式は現実に

合致せず、人民とその運動はさまざまに対立しあい、苦悶しているのが現状です。これを現実的に即して分析する（すなわち〈一を分けて二となす〉こと）が、喫緊の課題だと私は考えています。

一方を、労働貴族、貴族的プロレタリアート、上層労働者などを批判し、他方に立てる主体として、さまざまな名乗り（＝階級形成）が試みられてきました。流動的下層労働者、ルンペンプロレタリアート、下請労働者、フリーター、非正規労働者……など。しかしいまだに、〈一を分けて二となす〉力を持ち得ていないのが、残念な現状ではないでしょうか。

前田年昭さま

☒今日の日本における〈二〉の思考は、〈外〉を隠蔽する護符を切り裂く作業から始まる

4月28日付 松本潤一郎

このところ日本国民は元号の変更を寿いでいます。元号は憲法九条とともに、世界の激動から眼を背け、思考を停止させ、抑止という強国間の緊張関係を隠蔽して、偽りの平和を演出するための装置です。西暦の使用も恣意的ではありますが、西暦は世界がキリスト教原理＝資本主義によって支配されていることを図らずも示しており、その意味では政治性を隠していません。そして世界の動向を隠蔽する元号の機能も、もう失効しました。

改元の中、『漫画アクション』（二〇一九年五月七日号、双葉社）誌に、矢作俊彦氏と大友克洋氏による『気分はもう戦争3（だったかも知れない）』（以下『戦争』）が掲載されました。中国が覇権を握った近未来を舞台としています。中国自体、三つに分裂しているようです。日本は米中に共同統治されており、自衛隊の一部が自衛「軍」となって決起したのか、沖縄は「自治県」となっていて、伊良部下地島に敷かれた軍事滑走路をめぐる陸上自衛軍、海上自衛軍その他諸勢力による争奪戦が展開されています。中国と朝鮮の国境地域・豆満江は、第二次朝鮮戦争勃発後、ロシア極東・中華東北・^{アメリカ}国連軍の三者に統治されており、世界中の投資家が再開発を狙っています。

『戦争』は、旧作と同様、まさに「古い質の「対立」に介入し、新しい質を打ち立てていく」想像力

によって、今日における新たな局面を展望しています。思考を停止させる元号という〈護符〉を切り裂き、〈外〉を見せる想像力です。『戦争』の視点から見ると、世界は堅固な安定を誇るものとは全く別のもの、いつどこからでも介入し、揺さぶりをかけることのできる、過渡的な局面に見えてきます。『戦争』は〈二〉の思考の今日の実践の一例です。今日の〈一を分けて二となす〉分岐点は、この〈外〉を呈示するか否かに求められると思います。そして、強国の共犯に基づく偽りの平和を撃つ〈戦争〉を、仕掛けていくべきだと思います。

松本潤一郎さま

☒階級の隠蔽を切り裂くためには、時間と歴史への意識を奪い返す必要がある

5月5日付 前田年昭

前便での私の問いかけに対して、松本さんは直接のご返答ではなく、〈外〉の隠蔽を切り裂くこととのご返信をいただきました。汲んでいただいた私の趣旨は、日本社会の〈一を分けて二となす〉を、支配階級と被支配階級との境界再定義から始める必要を訴えたものでした。〈二〉の思考の今日的事例として松本さんが挙げた『気分はもう戦争3（だったかも知れない）』の批判的生命力に通じると思います。

元号とは何か。それは「思考を停止させ、抑止という強国間の緊張関係を隠蔽して、偽りの平和を演出するための装置」とのご指摘に同意します。今回の改元騒ぎのなかで、マスコミは「ゆく時代くる時代」（NHK改元特番）を演出しましたが、いったい誰が新しい時代がやってくると決めたのでしょうか。改元のなかに歴史意識をめぐる階級闘争を見て取る必要があります。

元号は単なる紀年法ではありません。時間を取り司る主人は誰なのかをめぐる、支配階級と被支配階級との路線闘争がそこにあります。改元を通じて、資本と権力は、歴史と時代を司るのは資本と権力であって人民ではないと宣言したのです。

似非中国派知識人たちが、文化大革命の暴力の前に立ち竦んで口を噤んでいていた1976年、傑出した間の演出で知られる国際的音楽家・武満徹は、

中国のプロレタリア文化大革命を、人々が「時の使用人」から「時の主^{あるじ}たろうとしている」ものと評しました（本誌通巻9号で紹介）。歴史修正主義への批判とは、階級的な歴史意識、すなわち時の主としての時間への意識と感覚を奪い返すことです。

黄帝は「五量^とを設け」、舜は「時月正日を協^とのえ、律度量衡を同じくし」、禹は「身をもて度と為し、秤^{はか}りて以て出で」たが、古来、時間と空間は支配階級が取り仕切ってきました。近代になって「歴史の共有」意識がブルジョアジーによって作られて国民意識の土台に据えられました。元号に踊らされる臣民意識は決して前近代のものではなく、天皇制同様に近代のもので、秦によって絶学された墨家は「異類^{くも}は叱^{はか}ぶべからず。説は量^とるに在り」と説きましたが、歴史と時代を区分するものは誰なのか。区分する権力を持つものはその歴史を創る階級以外にはあり得ません。時代区分論の衰退は、歴史意識をめぐる階級闘争における敗退の反映です。階級対立を隠蔽し、階級協調を説く護符を切り裂く作業とは、まづもって、時間と歴史を仕切るのは誰かという問題に正面から立ち向かうことと、私は考えています。

前田年昭さま

☒時間を支配して歴史を消去し断片化する動きと政治を消去する倫理主義の連携からの離脱が急務である

5月12日付 松本潤一郎

前田さんが指摘された、権力による時間の支配、これは資本主義による歴史の抹消にも繋がっています。あらゆるものが商品化されて時間的・空間的差異が抑圧され、今日ではこれらの商品を自在に選択できるよう、一枚の平面に並置されているからです。歴史が消去されると断片化が蔓延します。諸事象を繋いで歴史を紡ぐ糸が切断されるからです。前田さんが以前、仰っておられた今日の社会における「多様性」の称揚も、内実は資本主義によるこうした断片化の追認ではないでしょうか。例の改元は歴史の消去と断片化への加担であり隠蔽です。ここ数十年の「歴史」ブームは、むしろ歴史意識が蒸発したからこそ出現したと見るべきでしょう。歴史自体の商品化の現れです。

こうした事態に一役買ったのが、九〇年代以降に定着した倫理主義であると私は考えています。冷戦崩壊とともにイデオロギー対立も終わったという見解が流布し、イデオロギーよりも生命、大義よりも人権、という言葉説が支配的となりました。この言説は今日でも力をもっており、改元を祝う人たちの多くもこの言説に同意すると思われる。冷戦後に激化した原理主義的テロリズムは、イデオロギーと見做される以前に、端的に理解不能な異物として排除されています。政治が後退し、代わって倫理が前景化しました。今日の戦争は財産と生命のセキュリティ保障の名の下に行なわれています。これが倫理の前景化です。ここにはもはや政治はありません。むしろ政治を消去しようとする政治と形容した方が精確かもしれません。そしてこの倫理という煙幕の影で、先述した歴史の消去と断片化は続いています。権力は抵抗の抑圧ではなく、抵抗自体の蒸発に方針を変えました。この方針転換に、倫理主義の言説は利用されたのです。被抑圧者が抑圧を抑圧と感じず、権力による庇護を渴望するこの状況で、いかに政治を構想すべきか。これが今日の〈一を分けて二と為す〉作業の課題です。

参考文献：フレドリック・ジェイムソン「ポストモダニズムと消費社会」（初出1988）（合庭惇他訳『カルチュラル・ターン』作品社2006所収）

松本潤一郎さま

☒時間を区分する資格を持つものはだれか。それは歴史をつくるプロレタリアート以外にない

5月19日付 前田年昭

松本さんの「被抑圧者が抑圧を抑圧と感じず、権力による庇護を渴望するこの状況で、いかに政治を構想すべきか」という問いかけに、強い悔しさと憤りをもって、同意します。権力によってつくられた退位、改元という一連の祝賀ブームに踊る圧倒的多数の「主権者」の現状をみると暗澹とせざるをえません。1967年、初施行の「建国記念の日」に対して「不承認・反対集会に全国8900人、同盟登校に東大など全国26大学」という記録を振り返るとき、まさに今昔の感があります。

天皇明仁による退位メッセージは象徴天皇制の存

続を賭けた行動です。ならば、反権力の側は、これを天皇制廃絶の好機ととらえ、天皇制にはり付いている権威を引っぱがし、失墜させるべく、論議を巻き起こさねばならないはずで、翼賛状態の惨めな現状を、戦後、たとえひとときであっても「君主制の廃止」を掲げ得た日本左翼運動は自らの責任として総括する必要があります。

時代と歴史を区分するものは誰か。それはプロレタリアート以外にはありえません。被差別、被抑圧の度合いを言い立てる被支配階級としてではなく、将来必ずその位置につく支配階級としてのプロレタリアートとして、です。主体についていろいろ脱色して言い換える試み——プレカリアートしかり、マルチュードに至っては、空語としかいけません。歴史的な反省を忌避する思惑が透けて見え、プロレ

タリアートによるこれまでの苦闘の歴史を総括するのではなく、臭いものに蓋、いいとこどりをした観念論でしかないからです。あたかも暴力を脱色してプロレタリア文化大革命を称揚するがごときものです。階級闘争の歴史としての人類の歴史を区分する作業は、階級とは何か、人民とは何か、しっかりと再定義し、時を分ける立場を明確にすることからです。

唯物論者たらんとするならば、敗北を糧として正面から事実を見据えるところからしか、再出発することはできないのではないのでしょうか。「一を分けて二となす」作業は、緒に就いたばかりです。

(不定期掲載)

(まつもと・じゅんいちろう、言語労働者)

(まえだ・としあき、本誌編集、組版校正者)

連載

王兵映画劄記 (その2)

土屋昌明

『無言歌』(2010年、香港・フランス・ベルギー合作)

原題は「夾辺溝」、英語題は「The Ditch」。原作は、楊顯惠(ヤン・シエンホイ)のルポルタージュ『告別夾辺溝』。

この映画は、反右派運動で右派にされて、甘粛省の夾辺溝にある労働改造所に送り込まれた人々の運命を描いたドラマである。1960年、甘粛省のゴビ砂漠にある収容所に拘禁された右派たちは、昼は炎天下の不毛な荒地で開墾作業をし、夜は砂漠に掘られた穴倉で眠る生活であった。折しも中国全土が大飢饉が襲った。通常の農村でも飢餓状態となり、少なくとも二千万人が餓死したと言われる。ましてや、差別を受けていた右派の人々に配給される食糧はなかった。自己調達しようにも、砂漠にはろくな野草すら生えていない。その年の冬になると、厳しい寒さも相まって、餓死や病死する者が大量に出た。ここに収容されていた約3000人のうち、約2000人が

死亡したという。

映画はいくつかのプロットから構成されている。そのうちの一つは、収容されて餓死する人と彼の妻の話である。飢えた人々は飢餓に耐えられず、死人の肉をむさぼった。彼が死ぬと、彼の妻が訪ねてきた。夫の死を知って絶叫し、彼の墓を探し回る。彼の仲間が墓の有りを彼女に教えようとしらないのは、彼の死体が誰かに食われているからであった。妻は自力で夫の墓を探り当て、死体を焼く。別のプロットでは、登場人物の一人が、恩師とともにこの収容所から脱走しようとする。しかし、彼の恩師は砂漠を逃げる途上で動けなくなり、彼は恩師を置いて逃走する。

この映画を鑑賞した人が感じるの、「凄まじい悲惨」であろう。「ここには希望はほとんど見られない。これが当時の現実だったのだろう。人々が忘れてはならない歴史の痛みの再現である。下手に希望のドラマとして描かれるよりも、この過酷な状況のリアリズムに徹した描写はずっと胸に響いて

くる^①。この感想には、「凄まじい悲惨」「歴史の痛み」という素材の重要性と、「リアリズムに徹した描写」という方法の特徴が指摘されている。

では、この素材の重要性を、王兵はどのように認識したのだろうか。まずは、原作との出会いにあった。「これを撮ろうと思ったきっかけは、飛行機の中で元となるヤン・シエンホイの「告別夾辺溝」を読んだことです。登場人物たちのそれぞれの運命や生き方に大きな感銘を受けました。で、この映画を撮ろうと考えて、色々な準備を始めました。生き残った人々へのインタビューを重ね、資料を探したんです。「反右派闘争」のプロセスについては、当時から多くの本が出ていました。そういう書物を多く読み、自分の中に知識を蓄積していきました^②。インタビューした相手は110人にも及んだという。逆に言えば、王兵自身の家族や身近な人に取材するというドキュメンタリー的な出発ではなかったのである。王兵の周囲には反右派運動の迫害を受けた人はおらず、遠い親戚の中で右派にされた人がいた程度だった^③。つまり、身近な人の問題にこの問題を考えようとする動機があったわけではなく、彼自身のもっと歴史的な問題意識に起因していたのである。よく言われるように、反右派闘争は、中国共産党の政治に対する人々の思考を変え、それが現在も尾を引いている。王兵は、この問題を映画化することによって、中国現代史をとらえなおす契機を観衆に提供しようとしたのだと思われる。

リアリズムに徹した方法について、そのアイディアの出発点は、王兵がこの問題の調査において、父親が夾辺溝で死んだという息子に会い、彼が父親の手紙を王兵に見せたことにあるようだ。その手紙を読んでいる時に、王兵はこの映画をどのように作るべきかを理解した^④。というのは、その手紙が50年前に書かれたのに、まるで今さっき書かれたかのように、日々の出来事が綴られていたからであった。これに感銘を受けた王兵は、この手紙と同じことを映像で再現させ、自分が受けた感銘を観客にも共有してもらいたいと考えたのだろう。

その意味で、原作で語られたすべてを映画化したのではなく、夾辺溝の最後の4カ月だけにしぼって描いた手法は興味深い。それは、日々の中でも最も

忘れがたい経験を再現させたいという王兵の考えに基づくのだろう。王兵は次のように述べている。「当事者は何を忘れないでいたかで、それを取り出し、そこから映画の輪郭を見つけ出していきました。普通の歴史物ではなく、さまざまな人の記憶の断片を重ね合わせて、この映画を作ることにしたのです。そういう意味で重要なのは、ラストシーンです。数多くの人を訪ねたけれど、ある人は多くを語ってくれなかった。でも暫くすると、突然彼は、自分の感情を制御できないかのように、「初めて死体を埋めた時の感覚が君に解かるか?」と言った。当時人が亡くなると、布団や衣類をはいでしまって裸にし、谷間に行って埋めたようです。埋めようとした時、死体を狙う鳥の声がして、恐怖と共に、自分たちが運んでいるのは動物ではなく人間なんだと、強烈に意識したそうです^⑤。

王兵のこのようなリアリズムが、彼の出発点であるドキュメンタリーの作法にあることは理解しやすい。ある批評家が「真実に潜む死者たちの声なき声を拾い上げ、権力によって作られる歴史に揺さぶりをかけるように彼らの痛みを映像に刻み込む。これは劇映画ではあるが、その本質は紛れもなくドキュメンタリーといえる」と指摘する通りだろう^⑥。ドキュメンタリーの手法が生きている点で、この映画に特徴的なのは音と光の処理ではなかろうか。これについて王兵は次のように述べている。「この作品は音を入れていません。音と言うのは映画で重要な要素で、ポスト・プロダクションの段階で入れますが、この作品の場合音を入れると合わないのではと思いました。で、音楽に替わるものとして、風を入れようと考えたのです。天空を吹く風、近くの風、ドラマティックに吹く風、この作品は風の音によって始まり風の音によって終わります。光の使用にしても、多くの機材を運ぶ余裕がなく、昼間は自然光で、普通の光を固定して撮りました。困ったのは夜で、地下壕の外のシーンも2000Wのものが2つしか使えなかったんです。外の夜のシーンを撮るには少な過ぎます^⑦。さらに編集の妙についても指摘できるだろう。蓮実重彦が「撮ることの好きな映画作家だけに可能な卓越した編集の呼吸を、満喫しようではないか」と言っているが^⑧、この「編集の

呼吸」は、王兵のドキュメンタリー編集の呼吸なのだろう。

その映像は、天の青色と地の茶色の対照が見事に美しいだけではない。「凄まじい悲惨」が「映像美」で描かれているように見えるのはなぜか。これについて、「過酷な自然が異様に美しく見えるのは、その先の時間や解釈が払拭され、透明な眼差しを獲得しているからだろう」という意見は^⑨、映像美を理解するには理念的に過ぎるものの、見る者の無意識を説明しているとすれば、説得力を持つと言える。

この映画と『鳳鳴—中国の記憶』とは、言わば姉妹関係にある。『鳳鳴』の主人公である和鳳鳴の夫は、『無言歌』の舞台である夾辺溝で亡くなり、和鳳鳴は『無言歌』に登場する女性と同様に、夫に会いに行き夫の死を知らされる。このような偶然の一致は、実は当時の政策の変化に起因している。1960年12月上旬に蘭州で中国共産党による会議が開催され、大飢饉に対する緊急の対策が講じられた。この会議によって、右派とされた鳳鳴も行動しやすくなり、収容所にいる夫を訪ねることができたし、夾辺溝農場も解散したのである。

ところが皮肉なことに、この蘭州会議が開催されたのは、夾辺溝の惨事が露見したからだった。この件については、小説的な話が伝わっている。夾辺溝から帰還した陳景沅という人によると、1960年末、中央監察局の銭瑛が西北地区の視察に来た時、たまたま運転手が方向を間違えて明水河方向に進んでしまい、『無言歌』で描かれた場所を目睹してショックを受け、これを共産党中央に報告したという。「車が走っていくと、銭瑛は煮炊きの煙を見た。荒野にどうして煮炊きの煙があるのか？ 人の住まいがあるのか？ 砂丘には死体があり、風と日に曝されて、ゴビ砂漠にころがっているのが見えた。彼女（銭瑛）は運転手に車を走らせつつ、なぜこんなに多くの死者がいるのか？ いったいどういう人たちなのか？ と考えた。かくて農場（明水農場）に到着し、私たちの農場長（陳景沅らの監督）を探したところ、農場長は大声で「縛り上げろ！」と一喝、銭瑛を捕縛させようとした。農場長はそれが誰だかわからなかったのだ。車は三人掛けで、ほかに秘書と運転手がいた。秘書が、やめろ！ この方は銭部長なんだぞ

と言った。農場長は度肝を抜かれた。銭瑛は、右派の面々が黄色い顔をしており、食事や大小便するにもオンドルを降りることができずにオンドルの上で済ましていて、氣息奄々なのを見て、大いに驚き、すぐさま中共中央に電話をかけた。中共中央は、甘肅省委員会に電話し、人命救助をさせた。それで私は助かったんだ^⑩。

王兵はこの陳景沅にも取材していることを陳自身が言及している。しかし、『無言歌』にはその取材は反映していないようである。おそらく、このような材料は、現在編集が進んでいる『死靈魂』というドキュメンタリーで反映されるのだろう。一方、陳景沅は『無言歌』を見ており、画面に机やランプが置かれていることを事実と悖ると批判している。

このように見てみると、『無言歌』は、王兵の映画製作においてドラマとしての実験であったというだけでなく、中国現代史における巨大なテーマに対する王兵の挑戦であり、一作品に止まるものではないということがわかるだろう。

注

- ①村山匡一郎「無言歌 過酷な歴史、リアルに描く」『日本経済新聞』2011年12月2日（2014年5月7日閲覧）。
- ② <http://eiganotubo.blog31.fc2.com/blog-entry-320.html>
- ③シネマトゥディ <https://www.cinematoday.jp/news/N0036066>
- ④ Wang Bing : un cinéaste en Chine aujourd'hui, sous la direction de Caroline Renard ; coordonné avec Isabelle Anselme et François Amy de la Bretèque. Aix-en-Provence : Presses universitaires de Provence, 2014.
- ⑤ <http://eiganotubo.blog31.fc2.com/blog-entry-320.html>
- ⑥大場正明「過去を振り返る視点を排除し死者たちの声なき声を拾い上げる」<http://c-cross.cside2.com/html/a10mu006.htm> 初出：月刊「宝島」2012年1月号。
- ⑦ <http://eiganotubo.blog31.fc2.com/blog-entry-320.html>
- ⑧『群像』67（1）、330-332頁、2012年1月。
- ⑨大場前掲文。
- ⑩依娃『尋找大飢荒倖存者』明鏡出版社、2013年11月、381頁。ただし、ここでは銭瑛の名前を銭正英とする。同じインタビューのインターネット版で銭瑛とするのが正しい。また、同頁に銭瑛の肖像として掲出されている写真は、銭正英という誤写にもとづく別人の写真のようである。

（つちや・まさあき、本会幹事、専修大学教授）

蔵出し批評

続・むほんの権原はどこにあるのか（連載：滴水洞 010）

前田年昭

いま出ている『ビッグコミック増刊 ゴルゴ 13 総集編 vol.144』小学館 2006/9/13、に「百人の毛沢東」という話載っている。

——激動の中国。その次代を担うカリスマはいかに作られるのか……？ 中国辺境の原野に、百年前の風俗を忠実に模した村々があった。そして奇妙に同じ顔の少年たちがひとつの村に一人ずつ、すくすくと育っていた。一体誰が何の目的で……？ 実は、失脚させられた党長老の漢卓將軍が、死んだ毛沢東の体細胞からつくったクローンを、再現した同じ環境で育て、そのクローン毛沢東を担いで謀反を起こそうとする、というお話。

以下、漢卓（H）とゴルゴ（G）とのやり取り。

H：だが、テロリスト風情のお前には、決してわかるまいが……今の中国には、毛沢東は無くてはならない存在なのだ！

G：……今の中国に必要なのではなく、今のお前にとって必要なのだろ。

H：な、何っ！！

G：いくら、毛沢東のクローンを蘇らせても、いくら同じ環境を作っても、あのような男は、二度と生まれえない……なぜなら彼は、中国の人民によって作り上げられた、“人物”だから、だ……

今、彼のような人物が生まれえないのは、真に中国人民が欲してはいないから、だ……

H：ち、違うっ！！ 中国人民も絶対に、偉大な毛沢東の出現を待ちわびているはずだっ！！

G：毛沢東と過ごした、若かりし頃の華やかな思い出を、クローンを蘇らせてもう一度味わおうなどと…… 最期の“革命戦士”も、老いたものだ……

H：ううっ！！…… も、もう少しで毛沢東と二人でもう一度、真の共産主義国家を、創れたものをっ！！……

G：…… ……

H：おのれっ！！ 〈ドキューン……〉

G：……時代を逆行させる事は、誰にも出来ない…… 思い出は懐かしむだけにしておく事だ……

そう、ゴルゴのいうとおり、ひとりひとは歴史と社会がつくりだすのだ。毛沢東もひとりひとりの紅衛兵もそうである。日本文化大革命の紅衛兵も。だからこそ、ひとりひとりの生命と生涯は誰一人同じではなく、かけがえないものなのである。

生物学的なクローンを再現した「同じ」環境で育てれば同じ人間が出現するなどという荒唐無稽な物語は、文化大革命のさなかで大論争になった出身階級決定論（出身血統主義）の鏡像のように私にはみえる。

人間は生まれによって決定づけられるとする狭隘な血統論は根深い。そこには旧階級の刻印が押されている。旧い階級は支配の根拠として、生まれによる違いは超えるに超えられぬ違いとして刻印されているという血統論を重視してきた。また血液型や生まれ日時による「占い」などの習慣として生きつづけている。

しかし、革命（むほん）がその根拠としてこの狭隘な血統論をただ裏返して使う（「差別された痛みは差別された者にしか理解し得ない」というように！）と、それは逆差別を生み、「血統論」に反抗するエネルギーをマグマのように蓄積させる。

文化大革命における遇羅克による出身決定論批判は、狭隘な血統論に対するおさえきれぬ反抗の噴出だったのではなかったか。陳伯達による中央の見解表明も、血統論を批判し、本人の政治的態度をみるといいながらも、出身（親の階級区分）も考慮すべき、と、いっけん「正しい」ように見えるが、この現実の論争にわけいるには、あまりにも腰の引けた折衷論ではなかったか。

〔初出 mixi 日記 2006.8.21、

引用元 <http://www.teishsha.com/CR/cr010.htm>〕

今後の研究会予定

8 月例会 29 日(木)午後 6 時～ 専修大学神田校舎 12 階 社会科学研究所（夏休みで午後 8 時に閉室のため開始時間を 1 時間くりあげてあります）
鳥本まさき「廖亦武『銃弾とアヘン』について」 森瑞枝「廖亦武『銃弾とアヘン』邦訳書評」